

学 習 院 大 学 史 料 館 ミ ュ ー ジ ア ム ・ レ タ ー

Gakushuin University
Museum of History

Museum Letter No.23

発行日 ● 平成25年(2013)9月20日

もくじ

ごあいさつ	1
学習院・永青文庫・東洋文庫 三館連携展示 「東洋学の歩いた道」特集	2-3
三館連携展示のご案内	4

第71回 学習院大学史料館講座のお知らせ
学習院・永青文庫・東洋文庫 三館連携展示
「東洋学の歩いた道」
記念講演・シンポジウム

平成25年10月19日(土) 14:00~17:00

会場：学習院創立百周年記念会館正堂

- 14:00 記念講演 斯波義信氏(東洋文庫長)
「東洋学のおこりと東洋文庫」
- 14:45 シンポジウム パネラー ①村松弘一氏(学習院大学教授)
②三宅秀和氏(永青文庫学芸員)
③牧野元紀氏(東洋文庫主幹研究員)
- 16:00~17:00 ディスカッション(上記講師全員による)

入場無料・事前申込不要

ごあいさつ

史料館では、このたび永青文庫・東洋文庫と連携し、展覧会「東洋学が歩いた道」を開催いたします。「東洋学」を共通のキーワードとしながら、各館の蒐集の特徴や担当者の着眼を生かし、1館では実現できない多彩な内容の展示をめざしています。この3館は人脈の点で浅からぬ関わりがあるのですが、地理的にも文京区と豊島区という隣り合う区に存在しています。そこで、今回は3館を結ぶウォーキング・マップを作成し、私は実際にこの道を館員有志と共に歩いてみました。もっとも、史料館から永青文庫までは約30分で無理なく歩けましたが、その後は護国寺まで足を伸ばしたところで力尽き(7月末のことで、なにしろ暑かったのです)、四国のお遍路さんのように、護国寺から東洋文庫へと上り坂を含むルート後半の踏破は日を改めてということにしました。

もちろん、3館連携展示のタイトルにある「道」は、学問の発達を意味する比喩として使われています。東洋諸国の歴史を包括的に扱う「東洋学」は、日本では西洋の影響下に明治維新後に発達したものです。初期の代表者の一人で学習院でも教鞭を執った白鳥庫吉は、大学では西洋史専攻でした。東洋学研究に志したときには、「僕の前に道はない／僕の後ろに道は出来る」(高村光太郎「道程」)という状況だったことと察せられます。

もともと、日本は中国から直接、あるいは朝鮮半島を経由して文化的影響を受け、源泉としての中国文化の研究には長い歴史がありました。それが明治になって「東洋学」になったとき、対象が拡大しただけでなく、研究姿勢に帝国主義的要素が加わったことは否定できません。純粋な学問的関心が動機であったにしても、東洋学の発展は帝国主義の伸張と手を携えていました。その後遺症が最近また新たに意識されるようになったことはご承知のとおりです。東洋学の研究対象となった国々とわが国が真の和解に至る道は、果てしなく遠いのかも知れません。

それでも私たちは、今「東洋学の歩いた道」を見つめ直すことが希望へと続くという思いをもって、この展覧会を開催することにいたしました。関係者各位に厚く御礼申し上げます。

(館長 高橋裕子)

学習院・永青文庫・東洋文庫 三館連携展示「東洋学の歩いた道」特集

昔も今も縁の深い三館

「展覧会を開催する上で、人脈はとても重要である」とは、当館が毎年60人ほど受け入れている博物館実習生たちにしばしば話すことです。この度、学習院・永青文庫・東洋文庫が連携して展覧会を開催する意図は、三館同士の歴史的な繋がり、特に人的ネットワークが大きいという点が重要であるの言うまでもありません。詳しくは展示を御覧いただきたいと思いますが、白鳥庫吉、岩崎久彌、近衛篤麿、細川護立といった近代日本を語る上で欠かせない人物達が三館に密接に関わり、「東洋学」の発展に寄与しました。

しかしこうした重要な歴史的背景が備わっていても、実際、展覧会開催に漕ぎつけるのはなかなか難しいものですが、今回それを実現できたのは、三館の学芸担当者がかつて学習院という学び舎を共にしたという背景があります。業務多忙にも拘わらず、こちらの構想に快く耳を傾け、労を惜みず最後まで共に走り続けてくれたことに、この場を借りて感謝したいと思います。それから、資金面において通常不可能な展示方法や図録の作成、研究員の動員が可能となったのは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（学習院大学学長付国際研究交流オフィスとの共同事業）の助成を受けたことによります。重ねて感謝申し上げます。

(助教 鎌田純子)

学習院大学史料館特別展 「アジアを学ぶ—近代学習院の教育から—」

平成25年10月5日(土)～12月21日(土)

学習院は、明治21年(1888)、三浦梧楼が院長に就任すると教育改革に着手、歴史の授業数が大幅に増やされました。その中には、日本で初めての東洋史の授業「東洋諸国歴史」が組み込まれ、担当教員に白鳥庫吉があてられました。東京帝国大学で西洋史を専攻した白鳥は、手探り状態で東洋史の授業を開始しました。やがて近衛篤麿院長の下、アジアからの留学生を受け入れ、また修学旅行では中国や台湾、朝鮮へ渡航しました。こうした過程において、白鳥をはじめとする歴史地理課の教員が中心となり豊富な教材類(実物教材、標本、写真、絵葉書など)が収集されてゆきます。

今回の展示では、近衛や白鳥に由来する書籍、旧制学習院の東洋史の授業で使用されたと考えられる教材類、こうした教育を受けた学生達がその後どのように東洋への関心を展開させたか、という3つテーマに分けて学習院と東洋学について考察してみたいと思います。

(助教 鎌田純子)



唐三彩鎮墓獸
(学習院大学史料館蔵)



駐北京日本公使館での海外修学旅行団集合写真 大正7年7月28日撮影
(学習院大学史料館蔵)

永青文庫秋季展示 「古代中国の名宝—細川護立と東洋学—」

平成25年10月5日(土)～12月8日(日)

永青文庫は、昭和25年(1950)、熊本藩54万石の大名であった細川家の16代目当主細川護立(1883～1970)によって、自身が蒐集し、あるいは細川家に伝来した文化財の散逸を防ぎ、研究、保管、公開するために設立されました。

今回の展示では、設立者であり、美術品コレクターであった細川護立の蒐集した古代中国の文物を取り上げます。

細川護立は、華族の子弟として学習院に学びましたが、大名家の嗜みとして幼時より漢籍に接し、十代には漢学者の竹添井井(1842～1917)から漢詩を学ぶ一方で北京を実際に訪ねるなど、中国の文化や文物への親近と憧れが幼少年期から強くありました。長じては大正14年(1925)に始まる楽浪遺跡の発掘支援も行っています。

大正15年(1926)5月にロンドンで開催の万国議員商事会議に貴族院から派遣されると、護立はこれをヨーロッパにおける東洋美術の鑑賞と研究の絶好機とし、著名な美術蒐集家や美術商を訪ね、学者と交流しました。この旅行と、楽浪遺跡の発掘が契機となって、重要文化財の「三彩蓮華文三足盤」と「三彩宝相華文三足盤」、国宝「金彩鳥獸雲文銅盤」、同「金銀錯狩



国宝 金銀錯狩獵文鏡(永青文庫蔵)

獵文鏡」など古代中国の陶器や金属製品を護立は蒐集していきます。

蒐集に際して護立は、東洋陶磁研究所の奥田誠一(1883～1955)や京都帝国大学の梅原末治(1895～1983、東洋考古)、同じく狩野直喜(1868～1947、中国学)

ら親交のあった学者に助言や、入手したものがいかなるものかという情報を求めました。学者たちも護立の要請に応える一方で、学術的な探究心から護立蒐集品の展覧会への出品や熟覧を求め、展覧会とその図録や、彼らの論文、著書で研究成果が公表されました。護立は、発掘の援助だけでなく、蒐集によっても東洋学の進展に寄与したといえます。

永青文庫の展示では、東洋陶磁や東洋考古の学者や芸術家たちとのこのような交流に光を当てながら、細川護立が蒐集した名品を取り上げます。多くの方々にご覧いただければと願っております。

(永青文庫学芸員 三宅秀和)



重要文化財 三彩宝相華文三足盤(永青文庫蔵)

東洋文庫ミュージアム企画展示 「マルコ・ポーロとシルクロード世界遺産の旅—西洋生まれの東洋学—」

平成25年8月7日(水)～12月26日(木)

東洋文庫は大正13年(1924)に三菱第3代社長の岩崎久彌(彌太郎の長男)が設立した東洋学研究のための図書館です。東洋学の専門機関として、国内においては最古の歴史を有し、最大の規模をほこります。日本を含めたアジア・アフリカに関する学術資料を100万点余り所蔵しており、そのなかには国宝や重要文化財に指定される貴重書も数多く含まれております。東洋文庫は今日、こうした蔵書の管理や閲覧に関する図書館業務、所属研究員による所蔵資料を用いての研究活動、さらにはミュージアムにおける展示を通じて一般への普及活動に力を入れております。

蔵書の内訳は、「東洋」文庫らしく、漢文で書かれた中国関連の書籍が約4割と最多を占めます。その次に多いのが洋書で、約3割を占めています(残りは、約2割が和書、約1割がアジア諸言語となります)。意外に思われるかもしれませんが、東洋文庫のコレクションの粋は、じつは洋書に求められます。



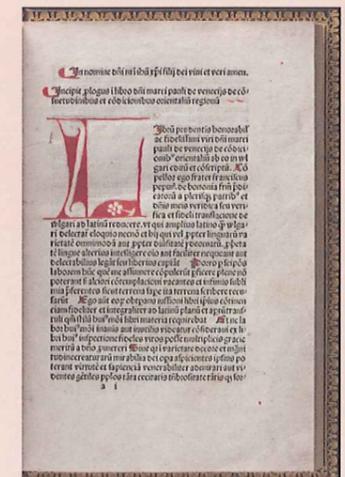
ウィリアム・ブラウ「アジア図」(東洋文庫蔵)

東洋学はそもそも、非西洋世界の「東洋(アジア・アフリカ)」に関する知識と理解を深めるために、近代ヨーロッパで成立した諸学問の総称です。その際に学者が参照したのが、東洋から帰還した商人、探検家、キリスト教の宣教師の記録でした。東洋文庫は彼らの足跡をたどれる貴重書や絵画、古地図等を多数所蔵しております。

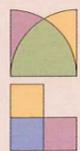
東洋文庫の洋書コレクションのなかでも特に知られているのが、世界最多77種類に及ぶマルコ・ポーロの『東方見聞録』です。今回はコロンブスも愛読したという、1485年にゲーテンベルク印刷機で刷られたアントワープ刊本を特別に展示します。『東方見聞録』は近代ヨーロッパの東洋学者には座右の書であり、フランス東洋学の巨人ペリオも詳細な注釈書*Notes on Marco Polo*を著しました。ヨーロッパの東洋学はマルコ・ポーロに始まったと言ってもよいかもしれません。

本展ではマルコ・ポーロが旅した陸と海とのシルクロードの道中をたどり、そこに点在する世界遺産の数々を東洋文庫の所蔵書画から構成するというユニークな試みです。マルコ・ポーロを水先案内人として、東洋学の時間旅行をじっくりとご堪能ください。

(東洋文庫主幹研究員 牧野元紀)



アントワープ刊本 マルコ・ポーロ「東方見聞録」(東洋文庫蔵)



三館連携展示「東洋学の歩いた道」のご案内

学習院大学史料館

特別展示

「アジアを学ぶ——近代学習院の教育から」

平成25年(2013)10月5日(土)～12月21日(土)

【開館時間】10:00～17:00

【休館日】毎週日曜日、国民の祝・休日、
開院記念日(10月17日)

【入場料】無料

【会場】学習院大学史料館展示室(北2号館1階)

【アクセス】

- JR山手線「目白駅」より徒歩4分
 - 東京メトロ副都心線「雑司が谷駅」より徒歩7分
- 〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
TEL 03-3986-0221 (代) 内線 6569

永青文庫

秋季展示「古代中国の名宝——細川護立と東洋学」

平成25年(2013)10月5日(土)～12月8日(日)

【開館時間】10:00～16:30(入館は16:00まで)

【休館日】毎週月曜日(祝日の場合は開館、翌火曜日が休館)

【入館料】一般:800円(団体10名以上は700円)

シニア(70歳以上):600円(団体10名以上は500円)

大学・高校生:400円

中学生以下:無料

※友の会会員、障害者手帳をご提示の方およびその介護者(1名)は無料

【アクセス】

- JR目白駅前より都営バス新宿駅西口行きにて「ホテル椿山荘東京前」下車 徒歩5分
 - 東京メトロ有楽町線「江戸川橋駅」出口1aより徒歩15分
 - 東京メトロ副都心線「雑司が谷駅」出口3より徒歩15分
- 〒112-0015 東京都文京区目白台1-1-1
TEL 03-3941-0850

東洋文庫

東洋文庫ミュージアム企画展示「マルコ・ポーロとシルクロード世界遺産の旅——西洋生まれの東洋学」

平成25年(2013)8月7日(水)～12月26日(木)

【開館時間】10:00～20:00(入館は19:30まで)

【休館日】毎週火曜日(祝日の場合は開館、翌水曜日が休館)

【入館料】一般:880円 65歳以上:780円 大学生:680円 中・高校生:580円 小学生:280円 ※ほか各種割引あり

【アクセス】●JR・東京メトロ南北線「駒込駅」より徒歩8分 ●都営地下鉄三田線「千石駅」より徒歩7分

●都営バス上58系統・茶51系統「上富士前」より徒歩1分

〒113-0021 東京都文京区本駒込2-28-21 TEL 03-3942-0280

- 本展示会は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代アジアへの眼差しと教育——学習院コレクションの活用」(学習院大学)の関連事業です。



3館共通の図録発売中(2,000円税込)



スタンプラリーのお知らせ

学習院、永青文庫、東洋文庫、そして都立庭園(六義園、旧岩崎邸庭園、旧古河庭園)をめぐる「東洋学の歩いた道スタンプラリー」を開催します。詳しくはHPや展示ポスター、チラシをご覧ください。

ミュージアム・レター第23号

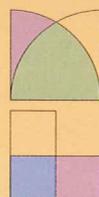
2013年9月20日発行

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

電話 03(3986)0221

内線 6569

FAX 03(5992)9219



Gakushuin University Museum of History

学習院大学史料館

●ホームページもご覧ください

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>